

I 被害応急調査結果

1 概況

(1) 気象概況

－気象庁資料からみた、平成30年の月別の気象概況は、次のとおりである－

1月 東・西日本で気温が低かった。東・西日本日本海側で降雪量が多かった。下旬に北・東日本太平洋側で大雪となった。

上旬は、冬型の気圧配置は長続きせず、日本付近を低気圧が頻繁に通過した。北日本や東日本日本海側を中心に曇りや雪または雨の日が多く、東日本太平洋側や西日本でもまとまった雨となった日があった。中旬前半は西日本を中心に強い寒気が流れ込み、東日本日本海側では大雪となった。新潟では12日の最深積雪が80cm となり、2010年2月以来8年ぶりに積雪が80cm に達した。中旬後半は寒気の南下が弱まり、気温が上昇した。下旬は、22日から23日にかけては低気圧が本州の南岸沿いを発達しながら通過したため、関東甲信地方や東北太平洋側では大雪となった。東京では22日の積雪が23cm となり、2014年2月以来4年ぶりに積雪が20cm を超えた。低気圧の通過後は、日本付近は強い冬型の気圧配置が続き、東・西日本中心に強い寒気が流れ込んだ。北日本から西日本にかけての日本海側を中心に暴風雪や大雪となったところがあったほか、太平洋側でも雪雲が流れこむところがあり、26日には名古屋で3cm の積雪となった。気温は平年を大きく下回り、さいたま（埼玉県）では26日に最低気温が－9.8℃と1977年12月の統計開始以来最も低い気温を観測するなど、25日から27日にかけて東京都や埼玉県の各地点で日最低気温の観測史上1位の値を更新した。

東・西日本では、気温の変動が大きかったが、強い寒気が流れ込みやすかったため、月平均気温が低く、東・西日本日本海側の月降雪量は多かった。冬型の気圧配置が強まる時期と低気圧の影響を受けやすい時期があったため、降水量は北日本日本海側でかなり多く、東日本日本海側と西日本で多かった。沖縄・奄美は、寒気や湿った気流の影響で、降水量が多く、月間日照時間が少なかった。

2月 全国的に、気温が低かった。日本海側では、北陸地方を中心に記録的な大雪となった所があった。東日本太平洋側は、降水量がかなり少なかった。

日本付近は強い寒気に覆われることが多かったため、全国的に月平均気温が低かった。

しばしば冬型の気圧配置が強まり、日本海側では上旬後半と中旬前半を中心に、発達した雪雲が日本海から盛んに流れ込んで記録的な大雪となった所があった。上旬後半は、福井（福井県）で日最深積雪が7日に147cm に達して1981年以来37年ぶりに140cm を超えるなど、多い所で平年比6倍超の積雪を観測した北陸地方を中心に記録的な大雪に見舞われた。この影響で除雪作業中等の死者が複数出たほか、福井県と石川県を結ぶ国道8号線では約1500台の車両が立ち往生するなど、交通網が大混乱した。また、農業用ハウスが倒壊するなどの農業施設被害も発生した。中旬前半は、肘折（山形県）で13日に日最深積雪が1982年11月の統計開始以降1位の445cm を記録するなど日本海側の広い範囲で大雪となり、九州や四国の平地でも積雪の所があった。

一方、東日本太平洋側は冬型の気圧配置の日や高気圧に覆われる日が多く、低気圧や前線の影響を受けることが少なかったため、月降水量がかなり少なく月間日照時間が多かった。

3月 気温は北・東・西日本でかなり高く、沖縄・奄美で高かった。降水量は北・東・西日

本で多く、北日本と東日本太平洋側ではかなり多かった。日照時間は全国的に多く、東・西日本と沖縄・奄美ではかなり多かった。

日本付近は低気圧と高気圧が交互に通過したが、日本の東で高気圧の勢力が強く、低気圧の通過時には南から湿った空気が流れ込みやすかった。このため、北・東・西日本で月降水量は多く、北日本と東日本太平洋側ではかなり多かった。特に上旬は、低気圧が発達しながら日本付近をたびたび通過し、各地で大雨となったほか、北海道では雪解けが急速に進み、河川の増水などによる被害が発生した。また、東日本太平洋側の月降水量は平年比163%となり、1946年の統計開始以来3月として1位の多雨となった。中旬以降は、日本付近は移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、寒気の影響も弱かった。このため、月間日照時間は全国的に多く、東・西日本と沖縄・奄美でかなり多かった。特に、東日本日本海側では月間日照時間の平年比が141%、西日本日本海側では平年比137%、沖縄・奄美では平年比171%となり、いずれも1946年の統計開始以来3月として1位の多照となった。

月平均気温は、日本付近に寒気が南下しにくかったことや、日本の東の優勢な高気圧の縁を回って南から暖かい空気が流れ込みやすかったことから全国的に高く、北・東・西日本ではかなり高かった。東日本では平年差+2.5℃となり、1946年の統計開始以来3月として1位の高温となった。

4月 気温は東・西日本でかなり高く、北日本で高かった。日照時間は西日本太平洋側と沖縄・奄美でかなり多かった。降水量は東日本日本海側でかなり多かった。

日本付近は寒気が南下しにくく、南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本から西日本にかけては気温が高く、東・西日本はかなり高くなった。特に、21日と22日は、日本付近は南から高気圧に覆われて気温が上昇し、飯塚（福岡県）など46地点で4月の日最高气温の記録を更新した。また、日本付近は低気圧と高気圧が交互に通過して全国的に概ね数日の周期で天気に変化したが、東日本太平洋側から沖縄・奄美にかけては移動性高気圧に覆われやすかったため日照時間が多く、特に西日本太平洋側と沖縄・奄美ではかなり多くなった。

一方、14日から15日と24日から25日にかけて日本付近を低気圧が発達しながら通過したため、全国的に天気が崩れ大雨となった所もあった。東日本日本海側では、低気圧や前線の通過時に湿った空気が流れ込みやすく、月降水量はかなり多かった。

5月 気温は全国的に高く、東日本と沖縄・奄美ではかなり高かった。北・東・西日本では降水量が多く、北日本日本海側ではかなり多かった。沖縄・奄美では、降水量がかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

高気圧と低気圧が交互に通過して、天気は数日の周期で変化した。北日本から西日本では、低気圧や前線の通過時に、南から湿った空気が流れ込んで広い範囲で雨となり、大雨となった所もあったため、北・東・西日本の月降水量は多く、北日本日本海側ではかなり多かった。特に、18日頃は前線が東北地方に停滞し、記録的な大雨となって浸水の被害が発生した所もあった。一方、沖縄・奄美では、上旬に梅雨入りしたが（速報値）、その後は高気圧に覆われて晴れた日が多く、前線や湿った空気の影響を受けにくかったため、降水量はかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

気温は、上旬に一時的に寒気が流れ込んで、全国的に平年を下回る時期があったが、中旬以降は北日本から西日本を中心に暖かい空気に覆われ、沖縄・奄美でも晴れた日が多かったため、全国的に高く、東日本や沖縄・奄美ではかなり高かった。

6月 全国的に気温は高かった。北海道地方では、降水量がかなり多かった。日照時間は東日本太平洋側ではかなり多く、東・西日本日本海側で多かった。

北海道地方では、天気は数日の周期で変化したものの、低気圧や前線の影響を受けやすく、月降水量はかなり多かった。梅雨前線は、上旬から下旬前半までは西日本の南岸から東日本の南海上に位置しやすく、下旬後半は日本海から北日本へ北上した。このため、東日本太平洋側では、梅雨前線や湿った空気の影響を受けにくく、月間日照時間はかなり多く、東・西日本日本海側でも多かった。また、月降水量は東日本日本海側で少なかった。ただし、中旬から下旬は梅雨前線の活動が活発になり、東・西日本でも大雨となった所があった。沖縄・奄美では、中旬に台風や前線の影響で旬降水量がかなり多くなり、月降水量も多かった。

月平均気温は、日本の南東海上で太平洋高気圧が強く、上旬に日本の東海上で移動性高気圧の勢力が強まりやすかった時期もあり、全国的に高かった。また、北・東・西日本では、上旬と下旬は高温となった一方、中旬は北から寒気が流れ込んだうえオホーツク海高気圧も出現して低温となり、月を通した気温の変動は大きかった。

7月 北・東・西日本では気温がかなり高かった。「平成30年7月豪雨」が発生。東日本と西日本日本海側では日照時間がかなり多かった。

8日頃にかけては、梅雨前線や台風第7号の影響で、多量の水蒸気が長時間にわたって流れ込んだため、全国的に大雨となり、西日本を中心に土砂災害や河川の氾濫など甚大な被害が生じた（平成30年7月豪雨）。

その後は、東・西日本では太平洋高気圧に覆われて晴れて厳しい暑さとなり、14日から26日にかけては、猛暑日となる日が全国の100地点以上のアメダス（集計地点数927）で続き、記録的な高温となった。月平均気温は、地域平均でみると、東日本で平年差+2.8℃となり、1946年の統計開始以来、7月としての第1位を更新し、西日本は1994年に次ぐ第2位タイとなった。地点でみると、全国の気象官署のうち53地点で高い方から1位の値を記録した（タイを含む）。

23日には熊谷（埼玉県）で日最高気温が41.1℃となり歴代全国1位を更新し、福岡などアメダスの108地点で通年の日最高気温高い方から1位の値を記録した（タイを含む）。

月間日照時間は、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かったことから、東日本と西日本日本海側ではかなり多く、東日本日本海側は平年比179%となり、1946年の統計開始以来、多い方からの第1位を更新した。

下旬後半は、寒冷渦や台風第12号の影響で東・西日本では曇りや雨の日があり、大雨や大荒れとなった所もあった。西日本太平洋側は、上旬の記録的な大雨に加えて、台風第12号が九州南部付近で速度が遅くなった影響で雨の降り続いた所があり、月降水量はかなり多くなった。また、北日本日本海側では、上旬を中心に前線の活動が活発となり大雨となった影響で月降水量はかなり多かった。沖縄・奄美は、上旬は台風や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、記録的な大雨となった。中旬以降も湿った空気や台風の影響を受けた日もあり、

月降水量はかなり多かった。

8月 東・西日本は、気温がかなり高かった。西日本日本海側は、降水量がかなり少なく日照時間がかなり多かった。北・東日本日本海側と沖縄・奄美は、降水量がかなり多かった。

東・西日本は、上・下旬を中心に晴れて気温が顕著に上昇した日が多かったため、月平均気温がかなり高かった。特に西日本では日本海側を中心に高気圧に覆われて晴れた日が多く、湿った気流の影響を受けにくかったため、西日本日本海側では月降水量がかなり少なく、月間日照時間がかなり多かった。一方、東日本日本海側は月の後半に秋雨前線の活発な活動で数回大雨になったため、月降水量がかなり多くなり、31日は記録的な大雨になった所があった。

月の前半は東海地方で日最高気温が40℃を上回る地点もあり、美濃（岐阜県）では40℃以上の日が3日間に及んだほか、前月28日から11日まで15日間連続で猛暑日を記録した。月の後半は、南からの湿った気流により大気の状態が非常に不安定になって局地的な大雨の発生する日があった。また、23日は、台風第20号が縦断した西日本を中心に大雨や暴風に見舞われた所があったほか、日本海側ではフェーン現象により気温が顕著に上昇して中条（新潟県）で日最高気温が40.8℃に達するなど、北陸地方で統計史上初めて40℃以上を記録した。

北日本は、秋雨前線の活発な活動で数回大雨になったことなどにより、日本海側では月降水量がかなり多くなり、太平洋側でも多かった。5日と31日は東北地方で、15～16日は北日本の広い範囲で、それぞれ記録的な大雨になった所があった。また、上旬後半はオホーツク海高気圧からの冷たく湿った気流の影響で、中旬後半は深い気圧の谷の通過後に大陸から東進した冷涼な高気圧に覆われた影響で、ともに顕著な低温になった。

沖縄・奄美は、台風の影響で大雨となった日の中・下旬に数日あったことなどにより、月降水量がかなり多かった。

なお、台風が9個発生してひと月の発生数としては1994年8月以来24年ぶりの多さとなり、特に12～16日は1951年の統計開始以来初めて5日間連続で台風が発生した。

9月 東・西日本では、日照時間がかなり少なく、降水量はかなり多かった。台風第21号と第24号により、広い範囲で暴風や大雨となった。沖縄・奄美では、気温がかなり高かった。

東・西日本では、月を通して秋雨前線が停滞しやすく、曇りや雨の日が多かったため、日照時間はかなり少なかった。また、日本の南で高気圧が強く、前線に向かって南から湿った空気が流れ込みやすかったほか、上旬には台風第21号、下旬には第24号の影響を受けたため、降水量もかなり多かった。北日本では、上旬と下旬は前線や低気圧の影響を受けやすかったが、中旬は移動性高気圧に覆われて晴れた日が続く、特に北海道地方では、湿った空気も流れ込みにくかったため、月降水量はかなり少なかった。沖縄・奄美でも湿った空気の影響を受ける時期があり、下旬は台風第24号の影響で大雨となった所があったが、中旬は日本の南に位置する高気圧に覆われ、晴れた日が多かった。4日には台風第21号が徳島県に上陸し、東・西日本で大雨となったほか、近畿地方を中心に暴風や高潮による被害が発生した。また、29日には台風第24号が沖縄・奄美に接近、30日に和歌山県に上陸し、強い勢力で東日本を通

過したため、広い範囲で暴風や大雨となり、被害も発生した。

気温は、北日本では暖かい空気に覆われる日が多く高かったが、東・西日本では、大陸から寒気が南下する時期と、日本の南から暖かい空気が流れ込む時期があり、平年並だった。沖縄・奄美では、中旬を中心に高気圧に覆われ晴れたほか、南から暖かい空気が流れ込む時期もあったため、かなり高かった。

10月 北日本は気温がかなり高く、沖縄・奄美ではかなり低かった。東・西日本太平洋側では、降水量が少なかった。北海道地方と沖縄・奄美では、降水量が多かった。

9月終わってから10月上旬にかけては、台風第24号と第25号が相次いで日本付近に接近した。1日には、台風第24号が本州から北海道南東海上を北東に進み、東日本で記録的な暴風となったほか、北日本太平洋側を中心に大雨となった。また、台風第25号は、4日から6日にかけて沖縄地方から九州の西を経て日本海を北上、その後温帯低気圧に変わっても強い勢力を維持して7日に北海道地方を通過した。この影響で、西日本や北海道地方を中心に大雨となり、九州や東北地方を中心に記録的な暴風となった所もあった。その後は、全国的に天気は数日の周期で変化した。北日本の月降水量は、北海道地方では上旬の台風第24号及び第25号から変わった低気圧に伴う大雨の影響でかなり多かったが、東北地方では平年並だった。東・西日本太平洋側では、秋雨前線に伴う活発な雨雲は南海上に離れて位置して南から湿った空気が流れ込みにくかったため、月降水量は東日本太平洋側でかなり少なく、西日本太平洋側でも少なかった。沖縄・奄美では、上旬から中旬にかけて前線の影響を受けやすく、月降水量は多かった。

気温は、北・東・西日本の上旬は、本州の南東海上で太平洋高気圧が強いことや相次ぐ台風の通過に伴って暖かい空気が流れ込み、かなりの高温となった。特に6日には三条（新潟県）で日最高気温が36.0℃で10月として歴代全国1位の高温となるなど、上旬の中頃は、東日本と西日本日本海側を中心に台風による暖かい空気の流入に加えてフェーン現象の影響で顕著な高温となった。北・東日本では、下旬にも南から暖かい空気が流れ込んで気温が高くなり、月平均気温は北日本でかなり高く、東日本でも高かった。一方、西日本では中旬に冷たい空気が流れ込んで低温となり、月平均気温は平年並となった。沖縄・奄美では、月を通して北から冷たい空気が流れ込みやすく、月平均気温の平年差は-1.1℃とかなり低く、10月としては1986年（平年差-1.1℃）以来32年ぶりの低さとなった。

11月 気温は、東日本ではかなり高く、北日本と沖縄・奄美は高かった。北・東・西日本は、降水量が少なく、東日本太平洋側を除き日照時間が多かった。

全国的に天気は数日の周期で変化した。高気圧に覆われやすく晴れた日が多かった。北・東日本を中心に寒気の南下が弱く、日本海側ではしぐれる日が少なかったが、下旬の前半はこの時期としては強い寒気が南下したため、北日本日本海側を中心に雪が降り積雪となったところがあった。上旬は高気圧に覆われて晴れたところが多かったが、東日本太平洋側は気圧の谷となりやすく、雲が広がりやすかった。9日から10日にかけては低気圧が発達しながら日本海を通過したため、局地的に激しい雨の降ったところがあった。中旬は、低気圧と高気圧が交互に通過し、全国的に天気は数日の周期で変化した。北・東日本は低気圧や前線の影響を受けにくく、降水量は少なかった。下旬も全国的に天気は数日の周期で変化した。

高気圧に覆われて晴れた日が多かった。

気温は、北・東日本は暖かい空気に覆われる日が多く、東日本はかなり高く、北日本は高かった。沖縄・奄美は南から暖かい空気が流れ込みやすく高かった。西日本は、寒気の影響を受ける時期と、暖かい空気に覆われる時期があり、平年並だった。

12月 沖縄・奄美は、気温がかなり高かった。北日本日本海側と東日本太平洋側および西日本は、日照時間がかなり少なかった。月末は、北・東日本日本海側を中心に暴風雪や大雪となった。

寒気の南下が弱く暖かい空気に覆われる日が多かったため、沖縄・奄美は気温がかなり高く、東・西日本も高かった。北日本は寒暖の変動が大きく、月平均気温は平年並だった。4日は日本海の低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込んで全国的に季節外れの暖かさになり、全国の観測点926地点のうち352地点で12月として最も高い気温を観測したほか、沖縄・奄美や西日本を中心に66地点で夏日になった。

天気は、全国的に概ね数日の周期で変化した。日本付近を高気圧と低気圧が次々に通過したが、東日本太平洋側と西日本は高気圧に覆われることは少なかった。冬型の気圧配置になることも少なく、晴れた日が12月としては顕著に少なかったため、東日本太平洋側と西日本は日照時間がかなり少なかった。また、北日本日本海側も気圧の谷の影響を受けることが多く、日照時間がかなり少なかった。なお、月末は強い冬型の気圧配置が続いたため、夕張（北海道）では30日に積雪が137cmに達して1979年の統計開始以来12月として最も大きくなるなど、27～30日は北・東日本日本海側を中心に暴風雪や大雪となった所があった。

表 1 梅雨入り・梅雨明けの状況（平成 30 年）

梅雨入り

地 域	本年	平 年	前年
沖 縄	6 月 1 日頃	5 月 9 日頃	5 月 13 日頃
奄 美	5 月 27 日頃	5 月 11 日頃	5 月 13 日頃
九州南部	6 月 5 日頃	5 月 31 日頃	6 月 6 日頃
九州北部	6 月 5 日頃	6 月 5 日頃	6 月 20 日頃
四 国	6 月 5 日頃	6 月 5 日頃	6 月 20 日頃
中 国	6 月 5 日頃	6 月 7 日頃	6 月 20 日頃
近 畿	6 月 5 日頃	6 月 7 日頃	6 月 20 日頃
東 海	6 月 5 日頃	6 月 8 日頃	6 月 21 日頃
関東甲信	6 月 6 日頃	6 月 8 日頃	6 月 7 日頃
北 陸	6 月 9 日頃	6 月 12 日頃	6 月 25 日頃
東北南部	6 月 10 日頃	6 月 12 日頃	6 月 30 日頃
東北北部	6 月 11 日頃	6 月 14 日頃	7 月 1 日頃

梅雨明け

地 域	本年	平 年	前年
沖 縄	6 月 23 日頃	6 月 23 日頃	6 月 22 日頃
奄 美	6 月 26 日頃	6 月 29 日頃	6 月 29 日頃
九州南部	7 月 9 日頃	7 月 14 日頃	7 月 13 日頃
九州北部	7 月 9 日頃	7 月 19 日頃	7 月 13 日頃
四 国	7 月 9 日頃	7 月 18 日頃	7 月 13 日頃
中 国	7 月 9 日頃	7 月 21 日頃	7 月 13 日頃
近 畿	7 月 9 日頃	7 月 21 日頃	7 月 13 日頃
東 海	7 月 9 日頃	7 月 21 日頃	7 月 15 日頃
関東甲信	6 月 29 日頃	7 月 21 日頃	7 月 6 日頃
北 陸	7 月 9 日頃	7 月 24 日頃	8 月 2 日頃
東北南部	7 月 14 日頃	7 月 25 日頃	特定しない
東北北部	7 月 19 日頃	7 月 28 日頃	特定しない

注：気象庁資料による。

(2) 被害概況

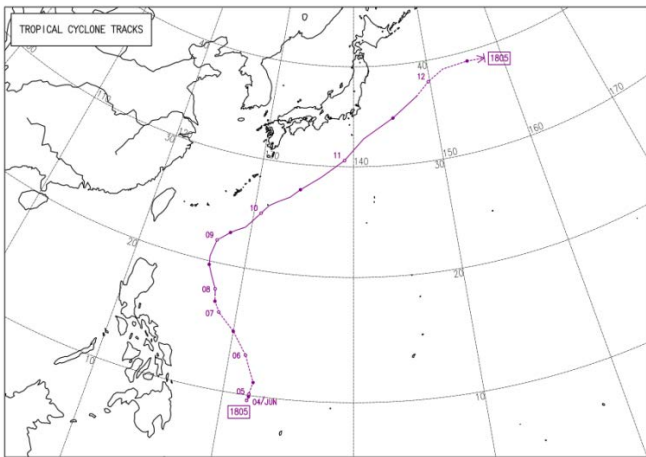
平成30年の日本への台風の接近数は平年より多い16個で、そのうち上陸数は平年より多い5個（台風第12号、第15号、第20号、第21号及び第24号）となった。

また、梅雨前線や台風第7号の影響により、日本付近に暖かく非常に湿った空気が供給され続け、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨（平成30年7月豪雨）となった。これらにより、浸冠水、落果、倒伏及び茎葉の損傷等による被害が発生した。

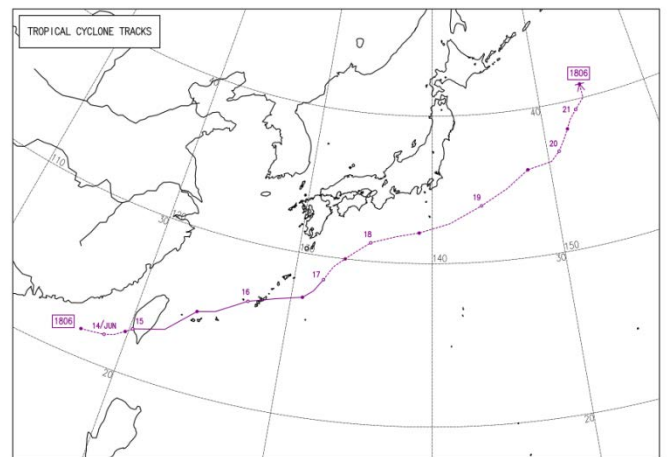
表 2 平成30年に発生した主要災害種類別被害概況（総数）

災 害 種 類 名	被 害 発 生 時 期	被害面積	被害見込金額	主 な 被 害 農 作 物	主 な 被 害 地 域
平成30年7月豪雨等	6月28日～7月11日	ha 26,000	億円 74	果樹、野菜、水陸稲	愛媛県、福岡県、 広島県 等
台風第21号	9月4日～5日	50,000	51	果樹、野菜、水陸稲	和歌山県、新潟県、 長野県 等
台風第24号	9月29日～10月1日	59,400	58	野菜、工芸農作物、果樹	鹿児島県、沖縄県、 愛知県 等

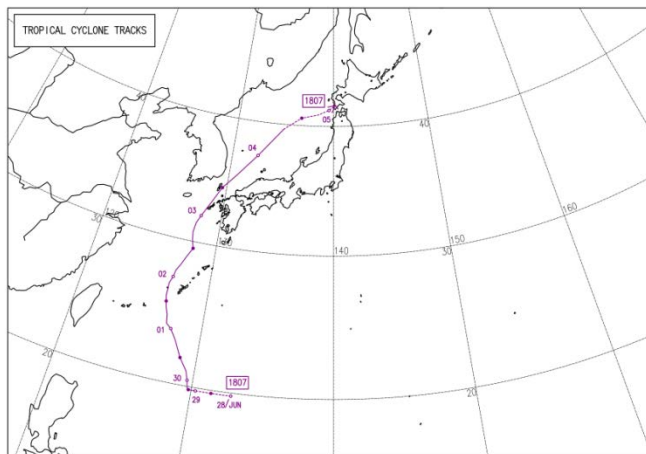
(3) 平成30年に日本列島に上陸・接近した主な台風経路図



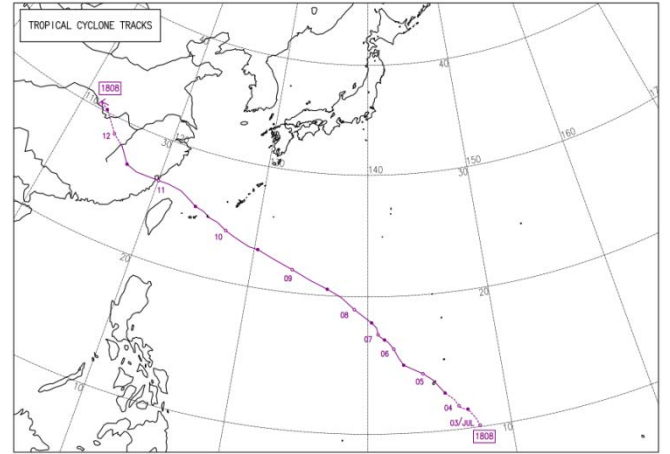
台風第5号(接近)【6月】



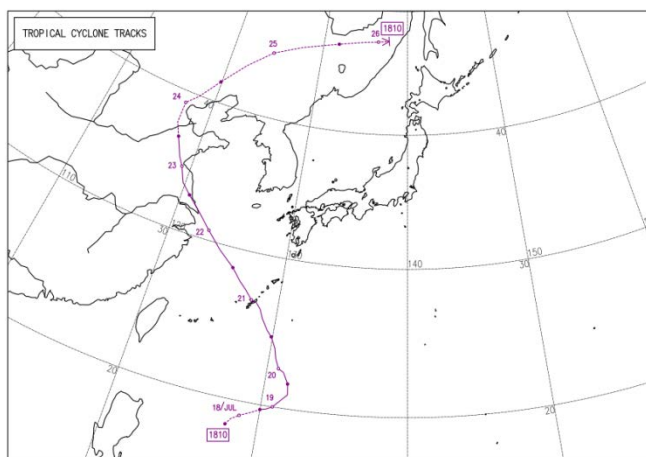
台風第6号(接近)【6月】



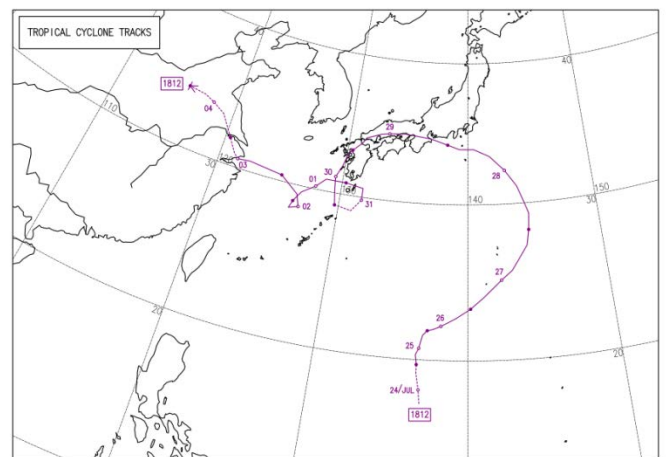
台風第7号(接近)【6月】



台風第8号(接近)【7月】



台風第10号(接近)【7月】

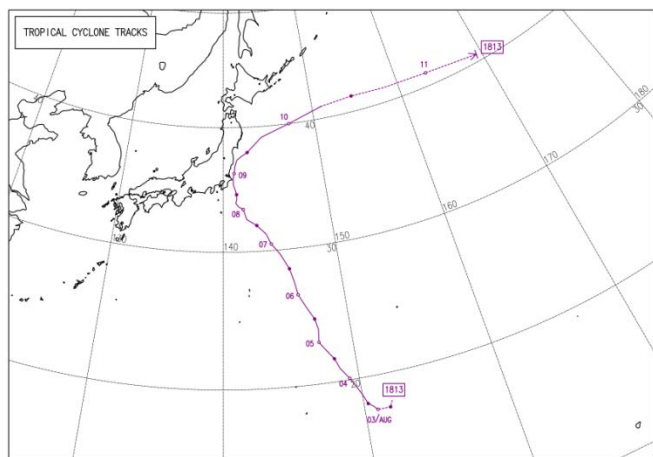


台風第12号(上陸)【7月】

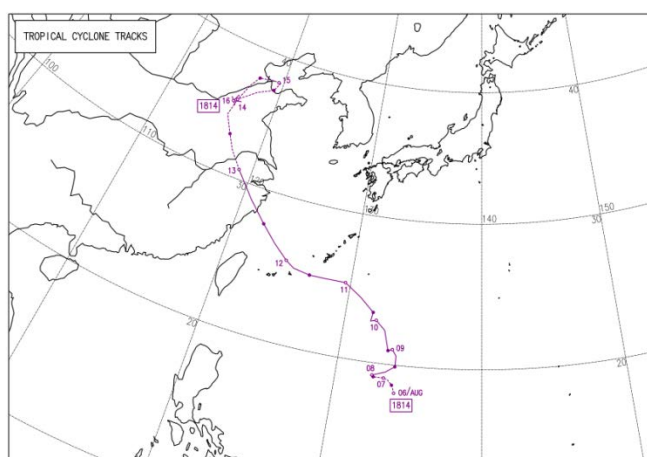
注：1 気象庁「台風経路図 平成30年（2018年）」より、平成30年に日本列島に上陸・接近した台風の台風経路図を引用した。

：2 【】内は台風の発生した月を示している。

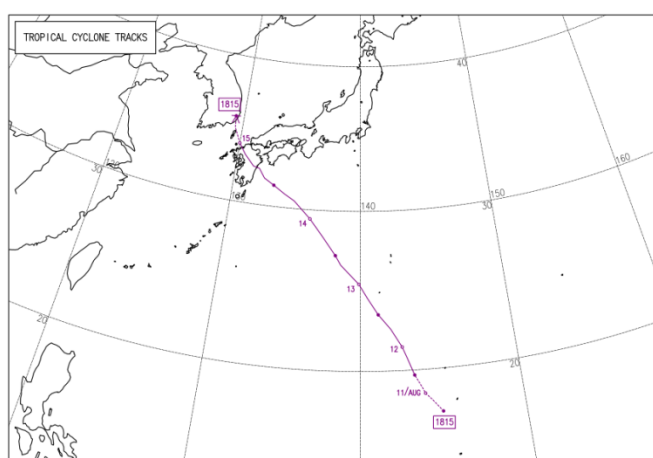
：3 経路上の○印は傍らに記した日の午前9時、●印は午後9時の位置で→は消滅を示している。また、経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧・温帯低気圧の期間を示している。



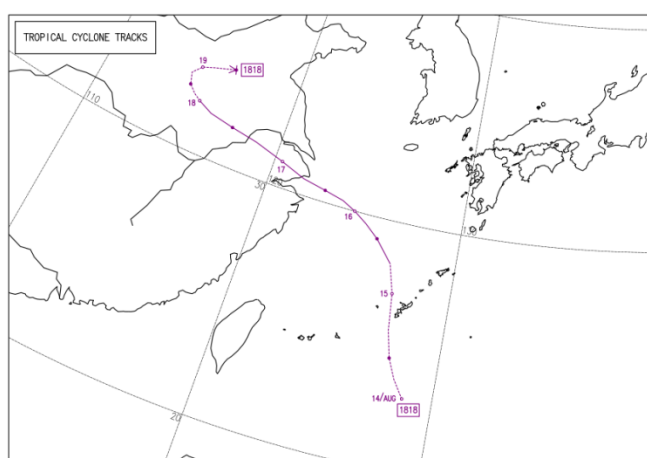
台風第13号(接近)【8月】



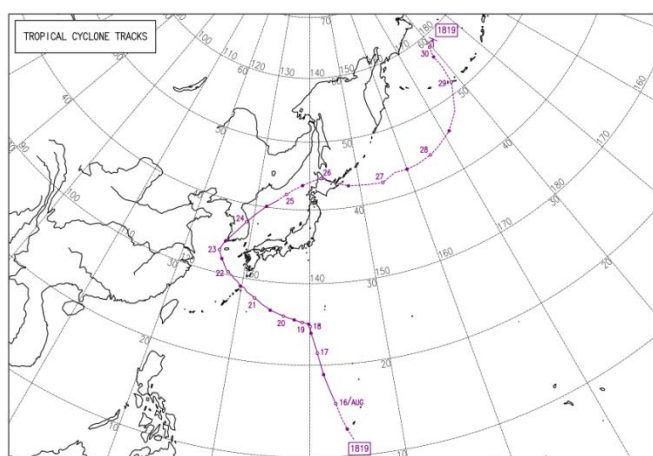
台風第14号(接近)【8月】



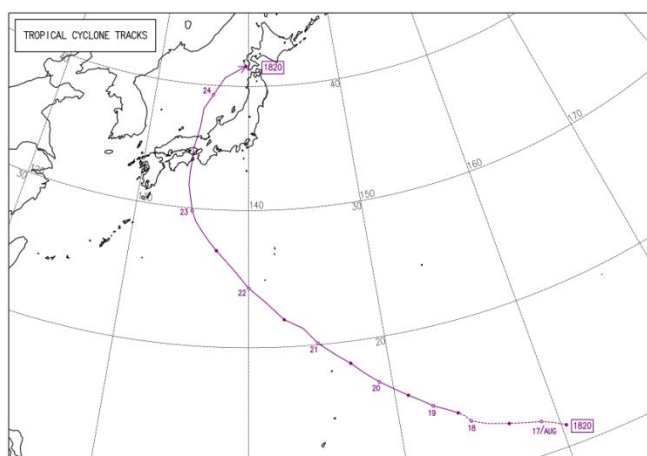
台風第15号(上陸)【8月】



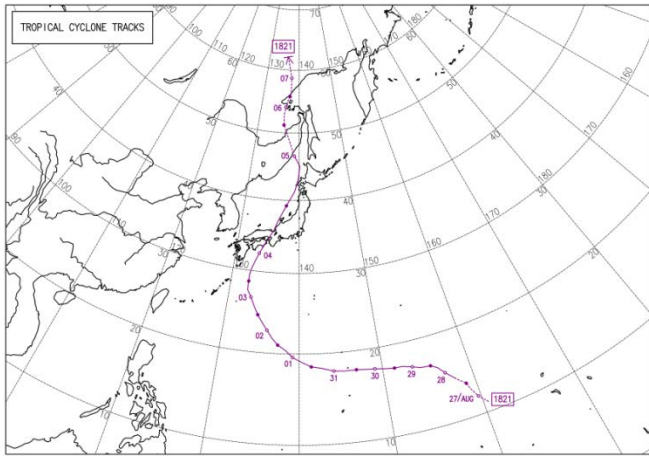
台風第18号(接近)【8月】



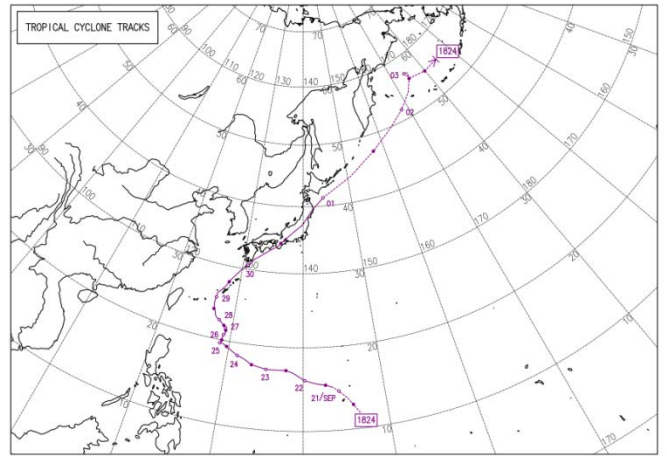
台風第19号(接近)【8月】



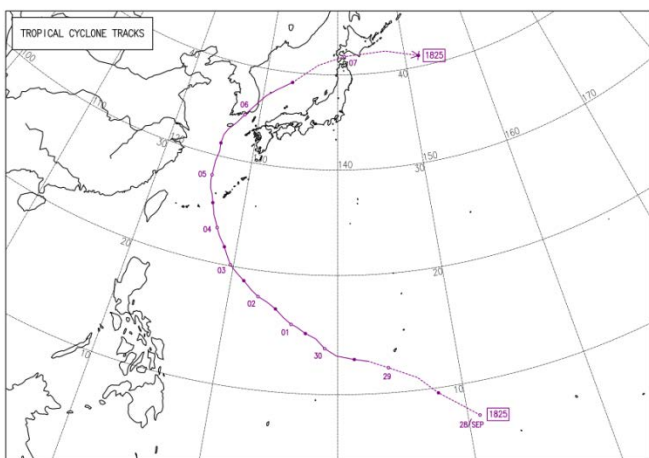
台風第20号(上陸)【8月】



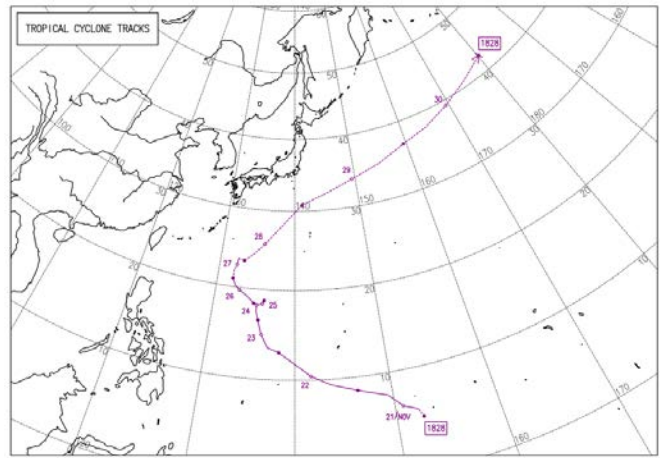
台風第21号(上陸)【8月】



台風第24号(上陸)【9月】



台風第25号(接近)【9月】



台風第28号(接近)【11月】